

機械と人間はなにが違うか

(ウスペンスキー『奇跡を求めて』1章 抜粋)

ある日、私はモスクワでG[グルジェフ]と話をしていた。私は少し前に短く滞在したロンドンを話題にし、ヨーロッパの大都市で展開されている機械化に向けての恐るべき動きに言及し、いまではこのめまぐるしく回転する巨大な「機械仕掛けのおもちゃ」のなかでしか生活することも仕事をすることもできなくなっていると言った。

「人々は機械になりつつあります」と私は言った。「疑いの余地なく、人々はときとしてまったく機械になりきっています。もはや考えたりすることができるとは思えません。考えることができたなら、そこまで完全に機械のようになれるはずがありません」

「そのとおり」とGは言った。「君の言うことは正しいが、全面的に正しいとは言えない。これはまず、どの頭を仕事に使うかしたいである。そういう仕事に使うべき頭を使ってそういう仕事をしたならば、かえってよく考えることができるぐらいだ。これもまた、考えごよに使うべき頭を使って考えごとをしたならばの話だが」

私は「使うべき頭を使う」というのがどういうことなのかわからず、ずっと後になってからこれを理解した。

「もうひとつのこととして……」とGは続けた。「君が言っているような機械化は、まったく危険なものではない。人間は機械を使って仕事をしていても人間でいられる。それとは別の機械化があり、そちらのほうがずっと危険だ。それは自分が機械になってしまうことだ。人はみなみずから機械になってしまっていると、君は自分で思ったことがないのかな？」

「それはあります」と私は言った。「厳密に科学的な見方をするなら、人はみな、外部からの影響によって動かされる機械です。ですが、ここで問題になるのは、そういう科学的な見方を全面的に受け容れられるかということです」[…]

「それが君の最大の思い違いだ」とGは言った。「それでもなにかが独自の道を選ぶことを可能にしている、機械化に対抗することを可能にしてくれていると信じていて、なんとすべては機械的なのだとまでは思っていない」

「そこまで思うわけないでしょう！」と私は言った。「芸術や詩や思想は、まったく別のレベルにあります」

「まったく同じレベルにある」とGは言った。「そういった活動も、他のすべてと同じく機械的なものだ。人々は総じて機械であり、機械的な活動以外のものを期待することはできない」

「そうだとしましょう」と私は言った。「ですが、機械ではない人間はいないのですか？」

「それはたぶんいるのだよ」とGは言った。「だが、君が注目する人たちではない。機械ではない人たちがいても、君には見分けがつかない。これを君にわかってほしい」[…]

「人々の間には大きな個人差があります」と私は言った。「人々というのはひとまとめにして論じられるものではないと思います。野蛮人もいれば機械化に呑み込まれた人々もいます。知識人もいれば天才もいます」

「まったくそのとおり」とGは言った。「人々の間にはたいへんな個人差がある。だが、人々の間にある真の個人差を君は知らず、それを見ることもできない。君が言うような個人差は架空のものだ。これを理解してもらいたい」

* * *

以上のやりとりと関係した別のやりとりのことも覚えている。

「現代心理学についてどのように考えますか？」と、私はあるときGに聞いた。これは、私が最初の時点から信用していなかった精神分析について話題にしたくて聞いたのだった。だが、Gは私がその話題を持ち出す前に話を打ち切った。

「心理学を話題にする前に、心理学とは何を扱い、何を扱わない学問であるかをはっきりさせておく必要がある」とGは言った。「心理学というのは人間を扱った学問であると定義しておこう。それなら、どんな《心理学》が機械との関係で成り立つか？ 機械の研究で必要なのは、心理学ではなく機械工学だ。だからわれわれはまず機械工学を研究する。心理学までは非常に遠い道のりだ」

「人は機械であることをやめられるのですか？」と私は聞いた。

「ああ！ それこそが大事な質問だ」とGは言った。「もしもそのような質問を君がもっと頻繁にしていたなら、これまでの会話はもっと的を得たものになっていたかもしれない。機械であることをやめることはできる。だが、そのためには何よりもまず、機械を知らなければならない。機械、つまりほんとうの機械は、みずからを知らず、みずからを知る可能性もない。機械がみずからを知ったなら、それはもう機械ではない。少なくとも、それまでのような機械ではなくなる。もう自分がすることへの責任を自覚するようになりだしている」

「ということは、あなたに言わせると、人間は自分がすることへの責任に無自覚だということですか？」と私は聞いた。

「人間だったなら責任を自覚する」。Gは「人間」という言葉を強調して言った。「機械には責任なんてない」